

一團

玉次 谷 人

●至梵天

一大國民の本領……………増田聖道

●衆妙門

一常樂院日經上人(續)……………野口義禪
一綱代木(其二)……………窪田孤松

●増上縁

一別勸請論……………中川親秀

●新消息

◎宗道式の舉行◎宗官式の元旦◎組寺の手賀◎西教
區布政通信◎懸賞論文の募集◎同盟雜誌及宗友會の
會合◎常樂院日經上人の傳記◎瀧友如漢居士の水眼

廣告數件

第八十一號

行發日五十月一年五十三治明

く開宗紀元六百五十年
を迎へ團員一統薰沐
んで茲に

隆昌を祝賀し奉る

邪法廢滅
賊常作衆伎樂
華經

統一團報第八拾一號

(明治三十五年一月十五日發行)

支 義

新年と宗教

▲新年は人生にありてはいと楽しきものとして迎へられてゐる、我等の臆記を追想するに、幼年時代の新年は殊に樂しかりしを覺ふ、然るに年の長ずるに従ひその歡樂の度は次第に減少せられつゝあるものゝ如し、幼年時代にありては胸中に何等責任の心を痛ましむるものなく、生活の困難に戦ふの悲惨なく、社會の濁浪に身を侵さるゝの苦痛なし、怨恨なく、嫉妬なく、排擠なく、欺騙なく、誹謗なく、虚禮なく、屈辱なし、總べて人生に於ける煩悶懊惱のことあるを知覺せず、晴空一碧清淨無垢の新年を迎ふ、さればその歡樂の多

大なりしは、畢竟幼年時代の精神状態の然らしむるのである。

▲門松と五三飾、祝の餅、屠蘇の酒、黒豆、数の子、稚牛房は年々歳々少しも變らない、然るに新年歡樂の度合は大に減少せらる、されば多くの人は新年を迎ふる毎に幼年時代を回想して、再び當年の精神状態に立戻りたいと願ふのである、我等もこの願の聞届けらるゝものならば、正に請願者の一人に加はり記名捺印するに躊躇しないのである。

▲然れどもひとたび複雑に進みたる精神は、只漫りに單純に復歸せしめたいと思ふても、容易に得らるべきにあらず、又漫りに無意義なる單純を希ふべきものでない、縱し自身は無意義に幼年時代の單純なる精神に復歸せんと希ふとも、社會の現象は到底その望みを容れないのである、うは我等は環宇の間に唯一獨存せるにはあらずして、その生るゝや家あり國あり同胞あり

家に父母兄弟姉妹親族故舊あり、國に君主先人長者あり、同胞に聖賢君子志士仁人等の多數の恩人あり、貧困者孤兒不具者痼弱等の幾多の可憐者あり、いかでか幼年時代の單純をのみ、慰ふことの出来ようか

▲我等は責任と云へる觀念を自覺すると同時に、複雑なる社會の戰場に進軍すべく餘儀なく決心せしめらるゝのである、若しも我等の生るゝや家なく國なく同胞なく一も責任の負擔すべきものなくば、我等は翻然として幼年時代の單純を學ぶべく、中天に紙鳶を飛ばし水の上に竹馬を行き、終日嬉々として戯るゝであらう
▲責任：責任：大責任：我等は自覺せねばならぬ：複雑：複雑：大複雑：社會は益々險惡に向へり：國民をして深く精神の根底に向つて、基礎あり光明あり安立あり活動ある健全鞏固なる思想を獲得せしめねば、次第に皮相虚偽の歡樂は人心の安慰を計るに足らなくなるであらう

年を謳歌せしむべきは、國家施政の大眼目たるべし、經國に心あるもの、思を此に致せるは、我等の疑はざる所、經國の士は必ずや孳々として事に此に従へるならん、我等は貧者の救済を以て、施政者の手に一任して袖手傍觀すべきにあらざるを知るも、又貧者の救済が宗教直接の唯一事業とは思はぬ、只教家は餘力以て、形而上にまでも貧者の救済を計るべきものと信ずるのである

▲我等が新年の光景に對して直覺したるは、新年の歡樂を皮相的に終らしめずして、願くは之に根底あらしめたいのである、又社會の複雑と生活の困難とは、在來の皮相的歡樂をだも奪ひ去りつゝあるを見て、願くは之に對抗し得べき精神を鍛ひ上げ、而して彼等に中心より新年の歡樂を謳歌せしめんと希ふものである、さてこの所願を満足せしむるものは何であらうか、實に之を宗教の力に依り求むるより外なかるうと思ふの

▲我等は新年を祝賀するものゝうの大部分は、既に已に皮相虚偽の歡樂に依りて、精神の恩籍を求むる能はざるを知覺したるを見る、うの甚しきに至りては此等皮相の歡樂だも求むるの道なく、大晦日に一年の債務を辨する能はずして、僅かに一月三日を過ぐれば直に家主薪屋米屋酒屋等の債鬼の襲ひ來るを思へば、新年何の樂しきことかある、却て他の顯官富豪の歡樂を羨望して、只簡陋悶懣を極むるのみ、新年何の樂しきことかあらんどの嘆聲は、我國の到處に之を聞くことか出來るではないか

▲新年の祝賀をして皮相虚偽に終らしめずして、中心より觀呼せしめんと欲せば、必ずや國民に宗教的の安立を得せしむるを要す、複雑困難の社會に在りて眞に新年を謳歌せしめんと欲せば、之を宗教的の安立に求めしめねばならぬ

▲生活を豊富に進め、野に飢凍の民なからしめ以て新である
▲宗教に依り人心の根底に、基礎あり光明あり安立あり活動ある健全鞏固なる思想を鍛へ上げなかつたならば、恰も幼年時代より年の長するに従ひ次第に新年の樂しき度合の減するが如く、社會の日を逐ふて繁劇に進み生活の月を追ふて困難に陥ると共に、新年の歡樂は益々皮相虚偽に流れ、遂に眞正の快樂は全く消滅するのである

▲世には思慮なく根底なき儀式習慣の、而かも非常に貴重視せらるゝことが多くあるが、我國の新年の光景に就て觀察するに、うの多くの儀例は殆ど噴飯に堪へない事柄がある、されど我等はこの幼稚にして思慮を欠き皮相にして根底なき儀例と雖ども、一概に之を廢止せよとは言はず、只此等の儀例の中心となるべき思想の根底に於て、今少しく條理ある創意を含ましめ、而して光明ある歡樂に導きたく思ふのである

▲宗教に依り真正なる安立を獲得せば、その効果は眞に偉大なるものである。それは宗教の力は儀禮の裡に誠意を籠め、困難に處して安穩を得、複雜に入りて靜閑を占め、皮相の事に根底を突へ、貧困に在りて富貴を羨まず、窮迫に遇ふて心迫らず、險惡に向ふて勇氣を生じ、姦邪に對して慈愍を起し、濁浪を呑むも清氣を吐き、能く責任の重荷を擔ふて人生の峻坂を越ゆ、斯くて怨恨、嫉妬、排擠、欺騙、誹謗、屈辱等、社會凡百の悲風慘雨に遭遇するも、一として煩悶懊惱の料となるべきものなく、暗夜に滿月を見、雨中に太陽を拜するの觀あらしむることが出來能ふのである。

▲新年は過去の一年二年を追憶し三四年を追憶し幼年時代を追憶し、遂に籍里出生の事に及ぶ、この追憶するに於て歡樂の減小を嘆つと同時に、又未來の一年二年を予想し、三四年を予想し、老後の狀態を予想し、最後死の問題に想到す

潜めるは敢て姑むに足らぬことである

▲若しも宗教的の安立を有せざる者が、死の予想の浮び來れるに際し、尙ほ歡樂を繼續し得べしとは、我等の如何にしても信じ得られざる所である

▲若し又新年に際して死の問題を想起せざる人々は、全く深思熟慮の欠けたるいと感むべき人なのである

▲新年と死の觀念の連續は、益々助長せしむべきものであつて、決して皮相の見解の下に、漫然之を拂ひ去るべきものでない、又は未來を徹見し將來を予想することの厚薄と深淺とは、正しく國民の文野を測量する尤も重要な標目であることを忘れてはならぬ

▲國民をして適當なる發達進歩を得せしめんと欲せば未來の徹見將來の予想をして、益々深く且厚からしめねば、社會凡百の事に於て決して完全の效果は見られぬのである、隨て死の觀念を捉らへて何等の理義なく、一概に之を拒否し放棄せしめんとするは甚しき謬

▲新年と死の觀念との連絡は、一体の門松や冥途の旅の一里塚と詠せしが爲り、國民の思想をしてこの連絡を結ばしむべき習情を造出したるものとは云はれぬ、我國民は新年の所感に就て、死の問題を予想する高等なる性格を有せるが故に、彼れ一体もこの國民普通の性情を流露して、彼れが如き國詩と詠じたのである

▲我國新年の儀例を見るに、ごまめ、數の子、豆、屠蘇等の品を用ひ、又鶴龜、壽、不老不死等の文字を書し、總べて死に遠ざからんと企つるの狀あるは、是れ却て新年と死の觀念との連絡あるを恐れて、幼稚なる思慮の下に漫然之を拂ひ去らんと試みるものであつて全く此等の儀例あるは却て、新年と死の觀念との連絡あるを反證せるものと見るべきが出來ようと思ふ

▲果して新年と死の觀念とは連絡ありとせば、宗教的の安立を獲得する人々の新年祝賀の裡面に、深き憂愁の

見と言はねばならぬ

▲要するに死の問題に對して、適當なる宗教的安立を與へずしては、多數の國民に均しく新年の歡樂を眞心に享受せしむることは難きことである

▲死の問題に對し適當なる安立を得せしむるの道は、宗教を指て他に頼むべきものなきは、識者の一致せる所である

▲然らば新年と宗教とは、密接の關係を有することは極めて明白であつて、隨て我國の多數の士女が、新年と宗教とを殊に隔離するの思想を懐けるは、全く大なる偏見と云はねばならぬ

▲實に宗教は、新年に際して走る我等の追憶の情と予想の心とに對し、能く適當なる解決と光明とは與へて而して貧富貴賤の別なく、四民平等に新年の歡樂を享受し、眞正に中心より之を謳歌せしむる所の、至絶至妙の力を有するものである、國民の一般にこの新年と

宗教との關係をば諒知すべきことである (完)

海 檀 林

開宗六百五十年の新春

惠 日 山 人

時運と云ふものは妙なもので、昨年は二十世紀初一年と云ふので、此機を外さず何事か教界に一花咲かせるべからずと曰んだ吾曹の叫びの反響かあらぬか、何しろ一般教界の寂寥に引かへ、我輩門の八教團は確かに昨年より動き始めた、言ひ換れば日宗統一の妙事は昨年確かに其萌芽を吹き始めた、則ち橘香會と云ふ學生團結の發企せる夏期講習會は、端なくも一般宗徒の同情を得て、鎌倉龍の口に賑々敷開演せられ、一句の虚空海會儘かに手筈はあつた、從來互ひに睨み合て居た變な惡感情は一掃せられ掛つた、夫から引續て雜誌の同盟は折伏主義の下に提携せられ、本化宗友會は

るのは統一と合同と云ふ事の「ケチメ」である、地味分れ〜に成てるものを結び付る順序としては、交渉聯合合同と云ふ風に何事も成て居るが、さて其合同と云ふやつが實に氣に喰はぬ奴で、やゝともすると混同派茶苦茶となり、隨て年處を經る内に乖離、滅烈分散、反目、はては元の「ホーロク」と成て仕舞ふのである、其はうらあるべき筈で、もど〜合同と云ふ奴が甲乙互に其主義を異にし乍ら、一時或事情の下に無意味の「クツキアイ」をやつて、其己が奉ずる主義に不忠實にして、唯眼前の算盤玉からのみはちき出した仕事だから、碌な終は告げなひのだ、處が統一と云ふ事はうらでな、各團結の把持せる主義と主義との研鑽磨を經て、成程如何にも是でなくてはと云ふ處へ落居して、而して茲に一切を攝合統一するのだから決して再び分離するの憂がない、だから聯合の直下に統一を生み出すべく心掛けて行かねばならぬ、則ち交

宗教研究の目的を以て遺作もなく成立つた、斯くして昨年暮から此新春にかけて、更に大に動くべく一の計畫が出来かけた、

夫は外でもない、本年はちよふと建長五年より指折り數へて六百五十年に當るので、此四月廿八日に前後して是非共紀念として大祝典を挙げ、衆て一つ驚天動地の大運動をせすんばと云ふ、意氣込の勃發して來たのである、

其準備としては、何よりも先づ一月末若くは二月初旬に、帝都の中央適當の會館に日宗眞俗大懇親會を開き、而して紀念祝典に就ての諸般打合をなすべく、さて亦其懇親會の準備としては、二三の有志が幹旋盡力の結果、去る十日小傳馬町祖師堂に發起人會の會合が催された、實に結構至極の事である、

で、何しろ斯く時運が回り來りて、統一の芽が吹きかけたのは數ばしい事であるが、茲に一つ注意を要す

涉聯合統一と斯ふ云ふ風に出來上れば、仕事はうれで本當なのである、
うこで如今聖門八教團の云爲はとうだと云ふに、今正に聯合の程度に居るのだ、此程度に居る内にどうか充分研究の上にも研究を積み、本尊論、修行論、其他あらゆる宗義問題をば、我他彼此の考を捨て、以て如實に、聖祖御照覽の下に聖旨の發揚をなし遂げ、うらして合同と云ふ奈何がはしき徑路に入らず、どうが至誠以て、統一の喜運を作り出したい、無責任の一時的局合の軍評定は眞平々々、

成程紀念大祝典、公會大演説、大舉傳道、辻説法、突貫的折伏軍の進撃何れもよろしい、是非共やるべし、やるべしだが一方に志士が熱涙、迸る大運動を突發してると同時に、片々では頑冥者流が迷信を鼓吹して本尊以外の魔物を振り廻はすと來ては、うれでは實に困るではないか、太刀先が鈍るではないか、此邊實に宗

徒の一大狂者を望ましむ、吾曹は思ふ正義の軍の門出には誘法の血祭りは必要であらうと、

何しろ千歳一週の此六百五十回の新春、實に喜ばしい慶んで祝意を表せねばならぬ、うれし同時に聖門の誰れ彼れ、緊揮一番してかゝらねばならぬ、是から先の運動に（畢）

意の一聲に足る廣開教 演 漢

●開宗六百五十年の紀念祝
典に對する希望 詩 谷

諸君本年は如何なる年であらうか、本年は衣鉢を日蓮聖祖より傳ふるもの、忘れがたき年廻りである、聖祖が故郷房州の旭が森に初めて題目を唱へ給ひしより恰度六百五十年に相當するので、この四月二十八日は如何にして迎ふべきかは、疾くより算書する處がなくては叶はぬ、個人にまれ、團體にまれ、一宗一派にまれ、本山末寺にまれ、若くは僧侶、若くは信徒、うれ

爾來三十星霜、侃諤の言論、破天荒の御振舞は、開宗の宣言を其儘實現せられたのである、されば聖祖の聖祖たる所以を考へ奉れば、徒らに書物推異に小理屈を捻りし學者でもなければ、筆と紙とによりてパンを求めし論客でも決してない、たい妙法の光明を普及して人世の闇黒を照さんとの御念願より外、餘念を雜へぬ性急剛志の末世主、それが聖祖の聖祖たる特長で、隱士遁世を標榜とした在來の諸宗間に異彩を放つた點なのである

我等が開宗六百五十年を祭つて聖恩に酬ふるの途は、唯聖志を遵奉するの一あるのみである、尤も之を遵奉する方法としては其は幾等もある、千百たゝならずだ新聞事業を興すも可、紀念碑の造營も可、或は教會堂の建築、或は大舉傳道折伏軍の組織、斯の如く數へ來らば日も亦足らずで、是れみな日宗各派の共同事業と

身分相應聖祖の鴻恩に酬ふる適當の考案を選ばねばなるまい、

個人的に法味を捧げ靈供を備へて、當日をまつるのもよろしい、併しそれだけでは逆も、聖恩に酬ふるには足りない、のみならず、團體的にせよ、宗派的にせよ唯一片の形式的法要は是れ何かせんである試みに聖祖が奈良朝時代の佛敎や平安朝時代の祈禱的佛敎や鎌倉時代の厭世的念佛哲學的禪宗に對し、どんな宣告を下し給ひしかを追憶して見玉へ、唯一片の形式的法要が聖恩に酬へ奉るの道でない事位は、直ぐに分るだらうと思ふ

聖祖の開宗は赫々たる朝敵を迎へてなされたでないか、是れやがて末法萬年の闇黒世界を照破して、麗々たる光明の天地を造り出さんとの御意、多事多望の前途を其發程の日に於て、祝し玉へる大典公式ではないか、

して當に爲すべき適當の方法であらう、が日宗各派現時の狀態では、如何なる美譽良事であらうとも、ヲイそれと直ちに替同して握手提携する事が出来ぬ、それは局外のものが聞たら甚だ奇異の感を感じずである、が、宗義の解釋を異にするの今日は事情止むを得ぬ事である、凡う宗義は宗派の根本義である、その宗義はして見解を異にしたならば、信仰の安心を異にするは當然の成行である、隨て感情の不調和は實に意外の點に迄及び、諸種の公共的美譽をも等閑に附し去る、と、勢の止むを得ぬ次第である、そこで我等は開宗六百五十年を迎ふるに就き、諸種の事業を企て、聖志を奉ずると云ふに先ちて、是非共一の先決問題を提供して、宗家萬年の大計を立て様と思ふ、それは外でもない日宗各派の宗義統一問題である

我等が發企した「宗友會」は、此宗義統一を目的とし

て昨年九月二十一日を以て瓜々の産聲を揚げたので、其後幸に發育健全見込十分なりと云ふものゝ、會するもの少數の有志者に過ぎず、おまけに一ヶ月一回の研究で、正味は僅か四五時間を出ですと云ふ有様、斯様な小な計畫で以て、五百年以上の歴史を有せる日宗各派の宗義の異説を解決し、整成統一を遂げ様と思ふのは、恰も一指をあげて天を蓋はんとするに似たりで、我等は前途の餘りに遠遠なるを想ひやられ、心竊かに帝祖に對し奉り慚愧措く能はざる處である、仍て此際是非共宗友會諸君の賛同を得て日宗各派宗義統一の速成を目的として、各派聯合の

『大學林』

を帝都に建設し、其開校式を以て開宗六百五十年の祝典に充て、「異株同心にして互に水魚の思ひを爲せ」との祖訓を實現し、歩武齊整宗門の根柢を鞏固にして、而して天下に臨みなば閩浮統一の事また敢て難事でも

のでない、教會堂建築を迂なりと云ふのでない、唯第一の問題でないといふのである、宗義統一を外にしては、何事も成効せずと斷言するのである、而して宗義統一が各派共同の大學林を建設するより外、最良の方法なきを斷言するのである、これ我等が開宗六百五十年に對する唯一の希望である、蓋し目下日宗各派の情勢では、これ以上のことを望むは無駄であると思ふ

(丁)

人の日も過ぬ朝日のさし處 有 麟

別 乾 坤

山本松風翁壽碯銘

無功業顯赫之迹。而使人修已勤業敬老慈幼熱々樂業者。是必有其德足以服人也。如我山本松風翁近焉。翁千葉縣下總國印旛郡吉倉村人也。鄉名族而世爲里正。按家譜。山本氏之先出自新羅三郎源義光。義光緒男進士判官相模守義業。爲出羽國由利山本縣押領使。因氏山本焉。自義業十世至重貞。屬安房里見氏戰死干鴻

なかるうと思ふ

各派聯合の大學林を建設するには、宗友會より十名の委員を選出して、各派管長及知名の士を訪問する事は一各派の同意を得し上は東京に一大協議會を開き、諸種の方法を議定する事は二建築費及基本金は全國の信徒より淨施せしむる事は三受持教師は各派より平均に選出する事は四斯くして日宗各派の統一を圖らば、是れ實に國家の大幸であつて、宗門の大慶之に過ぎたるものはなかるうと思ふ、この根本的統一の事業が成立する時は、大舉傳道折伏軍の如きは其餘波として、容易に組織せられ様と信する、由來佛教各宗が宗義の統一を度外視して、一時的事業の合同を企圖するが故に、何時も一失敗に終るのである、彼の佛骨奉迎の如き、大菩提會の如き、至極手近の殷鑑ではないか、我等は新聞事業をわしと云ふ

臺。其子伊豫守重祥。與板倉大炊助長谷川隼人山本權兵衛正木大膳等。攻有吉城不克。遁隱于吉倉里。子孫因家焉。子重治奉日素上人之化導。歸依我妙宗。勤苦精進世爲大檀越。自重治至翁十八世。奕葉綿々源遠而流愈大。嗚呼盛矣哉。翁名義典。小字爲太郎。後襲稱倉右衛門。松風其號也。考名忠英。妣並木氏。翁其第二子也。天保六年二月五日生。爲人外柔而內剛。幼穎悟不爲戲嬉。特喜讀書算術。初受業高野升之助。後遊石橋稻雄塾。其技益進。及長專農。事親盡其孝養。教鄉里子弟諄々善導之。一鄉莫不受其薰陶。又有記性諸式例條規記簿書之類。一見輒不忘。故人皆倚賴焉。元治元年翁年三十。承家爲里正。翁中素竭力教育。留意物產。多方獎勵不遺餘力。是以一村日以殷阜。田野日以肥美。人知孝弟之可重。風俗以篤。皆翁之力也。蓋翁之至誠有以感人而然也。慶應三年正月。與有志者謀欲開墾原野爲陸田。請之官。當時勘定奉行河津伊豆守不許而駁焉。明治七年九月撰爲千葉縣第十大區撰舉人。未幾轉第十大區三小區副戶長。爰地租改正專務。會縣廳遺少區某等檢其田。樹十字標于田中以量畝。田深者人苦之。翁謂不若用十字鏡可得在量而量之。吏不可。翁強請試用其器而量之。毫無舛差。吏始服。人以

爲便。此卷翁所發明云。十一年十一月改正郡區。命爲吉倉等五村聯合戶長。尋兼學務委員。十四年一月船越縣合資翁勉勵職務賜金若干。是歲兼印旛郡第一學區學務委員。十六年六月爲郡會議員。十月吉倉小學校新築成。翁與有力焉。取古時名稱住蒼小學校。二十二年四月依町村制。以吉倉村屬川上村。撰爲村會議員。二十三年一月兼勸業委員。先是同志者相謀設立牧畜社。後改稱兩全社。衆推翁爲社長。四年而辭職。翁娶九鬼氏。有一男三女。男莊三郎承家。自川上村長遷縣會議員。翁辭職之後恣意干風月之間。徜徉自適不復言世事。頃者門人背謀。建石欲叙翁之履歷表翁之功德以傳之後世。遣人遠訪濱名湖上之山寺。請文日禮。日禮與翁交三十有餘年。茲義不得辭。乃閱家譜。據狀錄其梗概如此。銘曰。

温温其德 蕩蕩其仁 以教以勸 誠感人神 聊人蒸 厥 是則是道 克孝克弟 風化日新 作銘鑄石 以表德純 於乎來世 視斯貞珉

明治三十二年己亥十二月

正二位勳一等 子爵 榎本武揚 篆額

遠潮 延兼山大僧正 牧田日禪 撰文

千葉縣師範學校助教諭 香川熊藏 書

草も木もみなみ佛の種なるを

うかひにれもふ人のはかなさ

ちかたきにこりゆく世の法の師の

みことたかはぬことのかなしさ

法の師のさよき心の月かけに

をりくかゝる雲のうたてさ

不思議てふことにまよひてみ佛の

まことの道にうむくれるかさ

何事もふるさは捨る世なりとも

法の道にはうひさかねたる

大原祥一氏か米國に留學し十年を経て其業を卒へ

歸國してとふらははれるをよるこひて

ゆ た か

きのふかも若か門出を送りしと

れもふも十年むかしなりけり

外の國のうの學舎に十かりの

春をれくりて歸る雄々しさ

つとめつゝなすへき業をなしはてし

かへるう國のたからなりける

つゝみなく歸りしまても外の國に

なを學ひつゝあるかどるれもふ

宮澤 圓隆

御題 ぞしたちて天津日影の長閑さに

野末の梅もかをり初めけり

春 興

春の來る道はと人のとふあらは

御 題

は、笑む梅のもと、答へよ 花登はな子

君か代の千とせの春のたのしさに

全

は、笑みうむる園の梅か枝

我菫の庭の白梅咲うめて

全

ゆたけき春を祝ふなりけり

新 年 梅

咲ことめつれどわきてうれしきは

もしのはしめの梅のはつはな

瓶 大 梅

も、ちゝの花にわかれて百千の

はなにさきたち咲やこのはな

をりにふれたる

うれしさに心さどひてかたるへき

この葉さへもあどやさきなる

十年ぞりきたへし君かくろかねの

うのはらわたを世にためしてよ

今よりは身をつくしても日の本の

國のひかりをかゝかせきみ

錦きてかへるやなにう日の本の

國のひかりをかゝわかず身は

天 鼓 集 (一)

熊架安藤日証師のなかくに隠味に當めるの人也、木枯の頃香も故ありて早稲田の人となりしが、長夜のつれく月に月下師が門を叩くことしばしばなりき、是も或る夜のこさなり進められたる一椀の進茶に、話頭儀併發に進みぬ、近時の住什はいかにやと問へば座頭リ駄目なりとて、取り出して示せる一巻の句集は之れなん誠を追ふて圓舞の一隅に自ら囁らんせとせる天鼓集のそれ……(源川生)

春雨やきのふの儘の輪かひ圓 清 月

ふいと來て鳥の覗く接木かな 同

畑ども庭どもつかす桃の花 同

はつ乙鳥軒端したしく覗き見 同

掃く度に薄らぐ庭の余寒かな 松 花

柳越し宿の名呼ぶや戻り丹
舟からも上りて踏むや春の草
咲く花に惜き各なれや嵐山
春の夜や風呂の戻りの廻り道

同
同
天舟
同

露 點 々

在清國天津 重松玉次

清きはちすも。濁り江の。泥の中にぞ。生ひ出る。光り輝く。佛性も。心の暗の。中にあり。けがれたりとも。濁り江の。泥を放れて。香にははふ。花やさくらん。さきつらん。曇りたりとも。煩惱の。心を捨て、佛性の。玉やてるらん。てりつらん。霜枯れぬとも。花の根の。朽果てたるにあらぬなり。池をのみ見る。人なれば。うを知らぬころ。道理なれ。灰心滅智も。佛性の。玉は消ゆべく。あらぬなり。形のみ見る。人なれば。うを知らぬころ。道理なれ。散るとも朽ちぬ。はちす葉の。うつろひやすき。さまなれど。池の心の。底深く。ひうめる花の。根ありとも知らで過ぬる。れるかさよ。汲めどもつさぬ。煩惱の深き心の。井の底に。ひそめるれのが。佛性の。玉もてりどば。誰人も。知らで過すぞ。かなしかる。されば佛は。世に出で。一切衆生。皆もてりど。教ぬさ

の里の龍の口。遂にかうべの。座になをり。有爲の肉團。さらばされ。家の柱を。倒しなば。なごかなれたら。住ひ得ん。未來は阿鼻の火に焼れ。現世はあはれどつ國の。鷺にとられし。ひな鳥の。なくより外に。詮なけん。身には法衣を。つけながら。うを知らずして。世にてらふ。亡國賊子。くびはねて。始めて祝ふ。千萬歳。國土安穩。吹く風も。五風たがはず。ふる雨も。十雨たがはず。閻浮提。異口同音に。題目を。唱ふる時の。來らんと。めげずひるます。弘通して。我日の本の。旭日彰。衆生の闇を。打やぶり。唯一無上の大道の。行手明るく。てらしつゝ。いばちからたち生ひ繁る。野らさきひらさき。植むませし。事の一念の良薬の。言の葉草は。年々に。いや生ひ繁り。榮むつゝ。無上菩提の。花開き。實相真如の。果をむすび。一切衆生の。よるこびの。聲は天地に。みちぬらん。聲は天地にみちぬらん。

至 梵 天

大國民の本領

増田 聖 道 演説

慶雲天を覆ひ千里同風目出度大方の諸君と明治三十五

として。其玉の。くしくめでたき。事をしも。まのあたりにぞ。示しつゝ。咲しはちすの。花のごと。千ひらのうてな。たぐひなく。くしくめでたく。われ人の乗りてぞ遊ぶ。ありさまを。まのあたりに。示しつゝ。寂光淨土は。佛性の。玉のひかりに。見ゆるなり。常樂我淨は。其玉を。みがき得し時。得らるなり。實相真如は。其玉の。もてる功徳に。外ならじ。うをみかきなば。光り出て。なれもれのれも。ひとつなり。無明のやみに。さまよひて行術もしらぬ。れるかさよ。うを教ぬんど。出にけり。うをみがかんば。かたからじ。下根下機なる。末法の。なれ等がために。今爰に。妙法五字の。題目と。詮じつめてぞ。のこしたく。ゆめ疑ふな。わするゝな。此五ツ文字の。くすりもて。なれ等か玉を。みがきなば。朝日に霜の消ゆるごと。嵐に霧の。はるゝごと。深き迷ひの。雲はれて。不變真如の。佛性の。まことの光り。出ぬべし。ゆめ疑ふな。忘るゝな。とりな違ひう。怠るなど。大慈大悲の。心もて。菩提河の。片はどり。夕露こむる。其ゆうべ。教ぬのこして。ゆきませり。教ぬかしくみ。かしくも。うを傳へんど。上行の。末法濁世に。出でまして伊豆の伊東に。佐渡が島。所をせかれ。流されて。片瀬

年を迎へ御同慶に存じます。私は大國民の本領と云ふ題に就て少しく御話申し上げたのであります。凡そ天地の通義と致しまして優者の勝て劣者の敗れると云ふとは必然の理であります。そこで、然らば其の優者とはどう云ふものであるかと申しますれば、私の考は世人の單だ腕力とか或は金力とか、凡て物質的の事に重きを置いて考へ居るのとは違ふのであります。勿論其等のものも助けの一つには這入るが、私の優者と申しますのは、天地を統一せる法報應三身の佛陀、此の佛陀を戴いて發展活動をするのを云ふのである。うここで世の中に事を成し遂げるに就きましては、單だ物質的の金力のみでは往かせぬ。又腕力のみでも往かせぬ。世間の言葉で申しますれば智慧も要れば仁も要る。勇も要る。此三徳が具備して金力が伴ひ始めて成るのであつて、此の三徳の具備するとの大なるたけられたりだけ世間の人物にしても偉大なのであります。其れはです古今の偉人傑士英雄豪傑と稱せらるゝ人は皆然うなのであります。うここで又國と申しますものが強くなり、國威が發揚しますにも單だ徒らに版圖が拡大のみで、強く且つ國威が發揚すると云譯のものでもありません。今申しましたやうな

人物が國に滿ちて居つたならば、國も強く國威も發揚するのであつて、而して其れに伴つて殖産興業有らゆる物質的の文明が附隨して來なければならぬのであります、茲に言ふ人はななけの下に住むと、如何に金力物質的の文明が盛になりましても、又假令三寸の舌端に雷霆を叱するの大雄辯家がありましても、一片の紙上に長江を掲げるの大文章家がありましても、若し此の發展活動が、天地を貫ける真正なる道義大慈大悲を垂れ玉つる佛陀を戴きて、發展活動するのなかつたらば、正義の觀念國家的精神が伴ふのでなかつたらば、全然無効に歸するのである、恰も爾んな人は禽獸が羊服を纏ひ居るやうなものである、又は癩病患者が錦衣を着けて居るやうなもので取るには足りませぬ故に一度び其等の人は其の着けて居る衣服を脱がしめたるならば、見るに堪へませぬ、そこで植物にしまして其根本より能く培養をしなかつたならば、決して十分なる發育は見られませぬ、國民としても大國民として發展活動しなすには是れにして此の無限絶待なる處の常住不變に無限の靈光を煥發して大慈大悲を垂れ玉つる法佛具足の大妙法の本に脈絡を通じ、而して源泉滾々晝夜を舍てざる處の活ける信念の送り出づるにあ

ば、所謂國破れて山河あり、城春にして草木深し、幾ら山があり、河があり、城があり、草木が繁茂しあるとも空屋同然であります、大聖日蓮は云ふ、國は法に依て昌へ法は人に依て貴しと、則ち其の法とは宇宙の大法である、天地の大原則である、此の宇宙の大法天地の大原則を本として發展活動しなければ、國は決して昌へ最優國最強國とはなれぬのである、孔子は云ふ學べば祿其の中に在り、吾人は此の宇宙法界を包める大妙法、天地の大原則と本として立ち發展活動したならば、必ず其の大國民たる品性資格も具はり、國としては全地球を包含し、五大洲を網羅統一するに到るのである、何となれば國の品性が高まり、國民が大國民の本領に適ふて發展活動することになつたならば宇宙列國の道義の標榜指南とあり、所謂身軀に於ける驕驕の如くなるからである、己に國が爾うなりまして宇内列國の人が大法の下に歸仰するにになりましたならば、其の時恰も日本の武威、日本の相撲と云ふが如く、五大洲は日本の亞細亞、日本の歐羅巴、日本の亞米利加と號ばれるのである、決して吾人の眼中は今日世人の言ふが如く、日本が世界の仲間入りをしたと云つてナンテコ舞ひをして喜んで居るが如き見地は望ま

らざれば、決して生きさうとした大國民とはならぬのである、彼身軀不隨なる處の中風患者は是れです、假令身軀が大きくあるとも、血液が程能く身軀を循環せぬからでありませう、一箇人に於ても一國にても其の通りでありませう、無精神無主義放逸墮落せる人が國に滿ちたならば、國は滅茶々やになりませう、爾う云ふ人は恰度勇士のやうなものであるから、壁を塗るにも塗ることが出来ぬ、ゴムにしましても弾力を失つて居るものは強く力が無い、精神の腐敗して居る奴輩は、幾ら居ても役に立ちませぬ、夫故大國民の本領として立ち發展活動しなすには、天地の大原則の下即ち一大開佛を奉じて立派なる主義一大正義の精神より發展活動しなければならぬのであります、然るに其の主義なく精神なく、唯だ盲動をして居るのみであつたならば、其の國民は目的の無い道中をして居るやうなものであります、或は目的の無い航海をして居るやうなものであります、地球には南北の羅針盤があるではあませぬか、地球には太陽系の軌道があるではありませぬか、國にしても人にしては羅針盤はなければなりません、軌道はなければなりません、然るに若し其羅針盤なく軌道なく、主義なく目的なく精神の無い國民であつたなら

ぬのである、最う一段も二段も見地を進めて、日本の世界日本の各國と云ふ見地に立ちて見たいのである、斯く申しますれば吾人は徒らに大言壯語を吐くが如くであるが、決して然うでない、天地の大道大原則宇宙の大法を本として、見地を立て發展活動すれば、必然の結果は、爾うなるのである、大聖日蓮の見地蓋し茲に在るので、聖祖日蓮は佛陀の本懷敕命を奉じて、閻浮統一の大漫荼羅を御顯はしになつたのである、佛は一切衆生をして、真正の文明開化の澤に浴せしめん爲に、即ち佛知見を開かしめんが爲に、色々法を御説きなされたのである、昔ベートル大帝は死に臨み、魯國の膨脹策として三つの遺訓を垂れたと云ふとです、果して是であるか知りませぬが、則其上策としては土耳古を併呑して地中海に出づる事、中策としてはペルシヤを征伏してペルシヤ灣に出づる事、下策としてはシベリヤを縦貫して太平洋に出づる事、此の三つの策を立てたと云ふとです、處で今日其の上中の策は色々故障があつて行はれず、終に下策を取て御承知の通り今日「セツセ」とシベリヤ鐵道を敷設して居ります、吾人の考は宜しく數年を出でずして、此等の鐵道が出

來上りニヨコ〜日本海に出て來た曉には、之を利用すれば宜しいのです、勿論爾う云ふ考の人も中にはある、其の他南北亞米利加の中頸ニガラガ運河も、今一兩年間で開通が出来れば、寔に日本の地勢たるや天府の都、闊洋統一の大都となるのである、今より數十年前横濱はさうです、茫々たる菅草の茂り居りし地なりしも拘はらず、今日は帝國第一の貿易港となつて居るではありませんか、是は地勢が然らしめたのであります、然らば吾人は日本の地勢が東西兩洋の樞軸に位置あつて、特に佛陀の神秘的な因縁のある事であれば國民一般に奮發し、日備稿ぎ土方根性奴隸根性蒸縮病的精神を去り、依法不依人、天地の大法大原則の本に脈絡を通じ、活ける信念を逆發し、公明正大に大國民たる本領に本づき、國民の歩武を一にして、而して二千五百有餘年皇統聯綿たる天孫千代に八千代に在しませす天津日祚の大君を戴き、光り輝く日章旗を正義の風に翻して大五洲を席捲し、而して幾億萬の蒼生をして眞正の文明即ち佛陀の慈悲光と仰がしめ、富榮元て目出度文明開化の天地と共に樂まんと希望するのでありとす、終りに臨んで本年元且に作りし新體詩を朗吟しす、

も、暫らく一義に約して言へば、紙墨木書の本尊之を佛寶とし、黄卷赤軸の法華經之を法寶とし、剃髮染衣の本宗の僧之を僧寶とすべからん、然るに當今の出家は三寶を賣て世を渡り、三種の謗法をも辨へざる僧のみなれば、實は僧寶とは申すべからず、然らば即ち當世在家の人々は、唯一体の題目に納るごと心得、信心強盛に題目を修行すへし、本經には此大良藥色香味々皆悉具足と説れて、皆悉の二字に萬善萬行諸波羅密を具足する大良藥なれば、一方として具足せずと云ふことなし、老若男女其死に望まば本門三大秘法の曼荼羅を以て、未來成佛の直印未代當時の大導師なりと觀念し依之臨終正念を期すへし、豈日重等の出家を頼みて成佛得脱の大事を決すべき覺束なし〜、誠に涅槃經の猶兒の譬、勸持品の詔曲の僧、是等を是れ師と認まば、却て無間地獄疑あるべからず、早々謗法を改めて本門三秘の大法を信すへしと存りに強折伏を募ら

抑も優勝劣敗は、天地を貫く通義なり、然れば天地の最優者、始め終りの變りなる、三千大界統一し法界宇宙を貫きて、無限の靈光煥發し、法佛一鉢具足せる、十界三千大妙法、仰ぎ戴く愛國の熱誠天地と貫ける、大國民の本領は、天地の正氣を吞吐して、依法不依人堂々と、天地の法則に順ひて、文明開化を發揚し、二千五百有餘年、金甌無垢の大日本天壤無窮に在しませす、神文神武の天皇と、光明り輝く日章旗、正義の風に翻し、一閭浮提を統一し、幾億萬の蒼生を、救済ひて眞理の光明を、仰かしむるに在るなれば、其の曉は五大洲、我日の本の内に、目出度く文化に潤はん、目出度く文化に潤はん

衆妙門

不借 常樂院日經上人 (接前)

在總本山 野口義禪稱
抑も三寶とは佛法僧の三なり、三寶の義種々ありと雖

せ玉へは、京洛中は申に不及日本國中の僧俗共、宛から獅子吼の思を爲し畏慄爲す所を知らず、此時に當り日經上人の出世なかりしかば、法華宗は滅亡せしなり、日蓮の偉業は水泡に歸せしなり、然るに上人の出世するに逢ふて、日宗一縷の命脈を既に絶んとするに續き得たるなり、上人たるもの佛立宗に執りては豈に畢世の大忠師と云はざるべけんや、上人是より出て、は他宗權門の輩を降伏し、内には日宗不借身命の信徒を養成し、權實本迹の論戰に暇隙あることなし、此間、或は大坂に或は堺に出て法戰を試み、問答既に十三回、將軍家の耳に達せしもの四度に及びたりと云ふ、又島日與等と書狀を往復して互に意志を通し、打權破迹に力を盡されたり、卓勵風發一世の耳目を聳動したる此の間の行動、今日より追想するも眞に壯絶快絶の舉と云ふべし、僧官權大僧都に至りしも此時也

(未完)

●網代木 (其二)

窪田孤松子

◎網代木と題して第七拾八號に筆をとりうめたが。其後は俗事に忙殺せられて三回ばかり書かなかつたら。山根君より何か書よとの嚴命である。固より網代木と命題したのは。時により折にふれては書く故にさは名づけたのである。其事は「朝ぼらけ宇治の川ざりたえ」にあらはれいづる濁々の網代木」の定頼卿の和歌をかりて。はしがきにはことばつて置た筈である。されば時に川霧の深くたちこめて網代木の見へわかれこともあれば、さなはいたくは責たてひぞと。秃筆を進めて書ことゝなつた

◎明治參拾五年と曆が改まつてからは。未だ日が没ひから珍らしき問題もなく。唯鎮毒救済民救済演説會が處々に開かれたのみであつて。其他に目醒しき出來事もないから。退ひて昨年未の事を少しく筆して見や

其他に變つたことをしなかつたとか。して見ると之が不言の間答でも謂のかしら。然し居士は最初の間は冷笑して居たうだが。終には面倒になつたと思へて律師を睨みつけ杖を取つて投出さふとして看護人に止められ。夫から次には痰壺へ手をかけて是又支へられたりふで。五月蠅とか面倒くさいとか謂ふ居士の態度であつて。何等の感じもなく折角の雲照律師の不言の間答が徒勞に歸してしまつて。誠に氣の毒な様であつたりふな。而して無神無靈魂の居士の自信は驕目するまで細積せられて。少しも動かなかつたので。雲照律師に歸伏したなど謂ふことは。殆んど影も形もないことである。板垣翁の辨妄があつて。事實の真相が公表せらるゝに至つたのだ。處が何か爲にするところがあつてか。兆民居士は無神無靈魂の自説を捨て雲照律師に歸伏したと傳ふるに至つた。若し板垣翁の辨妄がなかつたならば。遂に居士は雲照律師の爲に社會に露

うか。

◎律師雲照と居士兆民無神無靈魂の説を詳論したるもの則ち續一年有半の著を。世上に發表した中江兆民居士が。其自信を遂に抛擲して目白の雲照に歸伏したと謂ふことを。或二三の新聞が吹聴した。處から起つた問題が少しく世人の視聽を惹起たが。板垣退助翁の辨妄が公けにせられた爲に。此問題は根なし雲のやうに消てしまつたは餘につさらなかつた。板垣翁が兆民居士と雲照律師との面會の事實より。居士が平常の性行を仔細に致し來つて。其証妄を辨明せられたる全篇を讀して見たが。雲照律師が兆民居士の病態を見舞て不言不語の間答をしたほどの注文であつたりふな。余非常に此事を珍らしく感じたのだ。實は不言の間答とはそんなことをするのかしら。處が律師は病者の枕頭で。澤山な道具をならべて護摩を焚き。珠數をすり。咒文を唱へ。夫から五針を居士の兩手に刺せたりふだ

らるゝのであつたので。事實の真相か全たく違つて世上に傳へられたならば。其關係者たる雲照律師に於ては。板垣翁の辨妄を待たでもなく。徳義上自から進んで事實を明瞭にすべき義務があるではないか夫をも不知顔に黙過せんとするは。少しく余は意に解せぬ處がある。口善惡なき京童が。板垣翁の辨妄で眞言秘密が露はれて。護摩加持がさかなかつた道路に風説を傳へるに至つたは。雲照律師の徳を傷つけるではなからふか。

◎能仁監獄教誨師を訪ふ是も去年の十二月初旬のことであるが。余は能仁教誨師を千葉監獄に訪ふた。幸ひにして師に面接を得て署内の教誨所へ案内せられた凡う四時間程教誨の模様を聞いたが。尾崎雅喬氏と謂へる教誨師も居られて。種々教誨上の談話があつて。余は此の別世界なる處の消息を實見したが。實に驚いた。到底我等が自由の天地に生活をして居る考では。

此の別世界の状態は實に想像が出来ないのだ。何れ他日再び能仁君の紹介を得て仔細に筆に寫らうが。柿色染に襟番號の獄衣を着て。我等の同胞が此の中に苦役されて居るのを見ては。心がらとは謂ふもの、………
 ……實に偶然に堪ないもので。我等は振つて敎家の天職を屬み。勸懲の道を敎て衆惡を未萌に防がねばならぬと考へた。此別天地の状況は他日委しく書ことしやふが。能仁敎誨師幸ひに健在なれ

増上縁

別勸請論 中川 觀 秀

勸請とは何ぞや、吾人は解して曰く、行者か崇拜尊敎の所對の境を定め設くること也。換言すれば、信仰する所の宗敎的客体、即ち行者が交渉契合せんとする所の修行信心の對象をば確立設定することを意味せり。今改めて吾人の喋々を要せずとも、吾人法華行者が所對の境的と崇め定めしものは十界圓具の大曼荼羅

にして、是を以て信心修行の本尊となすべきは何人も異論なき所也。而して今は別勸請と云ふ、別とは之れ何をか意味せる、言ふまでもなく十界の本尊以外に於て、別段に或る特殊の個々の神佛を勸請することなり。我が十界中のものたるは勿論也。例へば中山法華經寺の鬼子母神の如き、攝州能勢の妙見大士の如き、備中高松の最上位經王大菩薩の如き等、皆是れ特別に勸請奉祭せる所のものにして、うの他處々の寺堂に祀れる神佛諸尊、又各檀信徒等がうの家毎に種々個々の諸神諸天を勸請せるが如き、實に是れ所謂別勸請なるもの也。

吾人今この別勸請に就て論究する所あらんとす、是れ既に少くも讀者諸君の一考に値せん、されば讀者諸君須らく坦懐宏量、吾人を目して詭辨を弄し。偏屈を説いて妄りに神明佛陀の尊嚴威靈を剝耗し汚辱し奉るの無信心漢と誤解せらるべからず。寧ろ之れ積年迷溺の中に神靈尊威を潰され給ひしをば、矯正清新して清淨純潔なる信仰の對象となし奉らんす微衷のみ。希くは讀者諸君、誠實に吾人の言議に就て考察猛省する所われよ。

神敎的迷信の魔府と批評しつゝあるの聲を、之れ果して那邊に起因せるか。更に注意せよ讀者諸君、我が日蓮宗が意氣零落、宗風頹廢して敎學甚だ振はざるもの之れ果して何者の原由せるか。更に一層深く觀察せよ讀者諸君、何故に我が日蓮宗徒は、僧と云はず。俗と云はず、概して他敎徒よりもより多く現實主義、利己主義、目の前主義、其日主義我欲の情に強きかを。吾人常に自他の爲に憂ふること久し、而してうの何等の原因が最も能く此等の注意を喚起するに足るものなるやを考究せるも亦甚だ深し。然れば吾人は今甚だ本意なくも此等の惡原因を一束して以て、別勸請の弊實に歸結せしめんと欲す。約言せば、宗風不振、意氣沮喪信仰の混乱墮落敗せるものは、是れ轉法的雜亂の別勸請に起因せること、最も深く且つ多しと爲す。讀者諸君、吾人の議論を以て牽強附會の臆談妄説なりとなすか。論證或は迂遠の嫌あらんも、請ふ少しく大袈裟に言はしよめ。

高祖日蓮聖人、此東瀛扶桑の嶋國に降生し給ひしは抑も何故で。而して像法まさに盡き、末法穢惡の當初に生れ給しは抑も何故で。又夫れ台密禪念律の諸宗、敎勢隆々、所謂高僧碩德星辰の如くに輩出し、蘭菊互に

うの絆を脱ふの緣會佛敎の盛時に腐り、何を好でか別に一宗を開創し給ひしか。殊に況や、大難小難類々として瘞り、惡口厲言刀杖瓦礫を蒙り、數々塔寺を擯出せられ、或は斷頭臺上の白露ともなり、或は北海孤島の寒鬼ともなり給はんとしてまでも、總うの大主義大主張を任せ給はざりしは抑も何が故ぞや、治索なる白眼者流、恐らくは因縁と好事と野心との名を以て之を解し去りなん、さればこゝ吾人は爰に贅言の冗贅ならざるをも要する所以也。

聖人が、呱呱の聲の長より、付法遺言の夕に至るの一期生は、實に白法隱沒の世を救はんとにありき。ア、如來の使！ア、本化の薩摩！、苦難交も辞せず、榮名顯達毫も意はず、三十年間大法の鼓は、眞に混沌たる五里の濃霧を撥けし、霧中に彷徨せる迷妄の衆生に與ふるエンゼルが福音にてありし也。されば無明の長夜を照消し、生死の煩惱を拂去し給ひし、かの玄題七字の唱聲は、人は之を何とぞか解せる。
 降生の大事因縁と超世超凡の該博なる才識とに依て開顯せられ、熱烈不動の大勇猛力大信仰力に依て唱道せられたる、如來滅後五百歲始開顯未曾有の大曼荼羅是れ實に紛々優々として錯雜迷亂窮りなき信仰界の一

大新生面にあらずや。否實に信仰統一の爲の大標的にあらずや。

詳言すれば、或は自性法界宮裡の毘盧遮那佛に信敬し或は東方薬師の瑠璃光に恍惚たるあり、或は西方極樂の往生を希求し、或は天神に渴仰隨喜の涙を流し、或は狐狸野干の畜類まで奉祀して冥福を懺悔するものすらあるに至れり。我が佛教界の混雜錯乱はうの高尙深遠の理論を以て糊塗し粉飾せられ、實に名狀する能はざるの殺風景を現出せり。當時に於て、別に本化別頭の風光を發揚し給ひし高祖 登平々凡々たる他門流の餘論を管めて満足し給はんや。十界圓具の大曼荼羅の創頭と、軍信口唱の唱題成佛とは、釋尊以后未曾有の大發明にあらずや。この本尊。この唱題を以て佛教諸宗を統合し、以て信仰界を歸一せしめられんとし給ひしもの、實に之れ立教開宗の大主眼にあらずや。これこの世に、これこの土に降生し給ひし大因縁にあらずや。種々の大難風の前の塵なるべしとの大強情大信仰にあらずや。約言すれば、多神教的佛教をば、哲學的汎神論的大本尊の下に統一せられんとせし也。否、したまひし也。之を専門的に云へば、誘法禁壓、正法宣揚の大標榜也。請ふ「本尊鈔」「當体義鈔」等の御妙判をば參

の如き雜亂迷妄、本末顛倒も亦うの極甚なるものにはあらずや

斯の如く變化か發達か、將た墮落か、否らずんば邪徑に走れるかの今の多神教的日蓮宗は、現金的利慾主義の國民の歡迎を受けをれり、故に御寺の繁昌のはどは如何に、住持和尚の得意のはどは如何に、實に想ひ見るべき也。宗務院なる行政廳は爲に支へられ、檀林教育はうの収納に依て行はれ、寺格僧階は賽銭の収入に比例し、布教傳道はこの名稱を暴用して形の如くにせられ、而して袈裟衣珠數煙草入の三品を始めとして、租稅義金赤十字會費等をも支出して、慈悲家たり公民たり、而して小僧妻若妾嬖下女下男等には、御師匠様檀那御主人を以て款待せられ、威張り散しつゝあり、まことに調法なる哉、大切なる哉、別勸請の諸尊。反之、纏て顧みれば一宗を經緯すべき宗法は如何に、教學は如何に、眞に吾人は多くを言ふを欲せざる也。然れば吾人は宗義を蹂躪し、教學を壞廢せしめてまでも日蓮宗と名乗らざるべからざるの理義を認むる能はざる也、唯利これ求め、唯名これ求め、唯金これ求め唯逸樂これ希ふが如き、俗腹餽魂の徒輩をも日蓮門下と呼ぶるべからざるの理由を見出すを得ず。噫、ま

照せらるべし。

然るを今は全く多神教的日蓮宗と化し終れり。即ち信仰の客休は多岐多様にして、殆んど他教派と擇ぶなきが如く、否、却て劣れるか如き觀なきにあらざるか如し。吾人は今の日蓮宗に満足すべきか、將た高祖の日蓮宗に歸嚮せんか。

論よりは事實の證據が許さるは、看よ々々、中山の賽客、鬼子母神堂の太鼓を打つを知るも、一人として本堂祖師堂に親しく大本尊の威容を拜することを爲さず。さしも高祖入涅槃の靈跡として尊ふき池上も、今や漸く長榮稻荷の聲價を以て代表せられんとす。うの他、柴又、能勢、高松の如きに至つては、唯帝釋、妙見、稻荷の外又何等の本尊を要することを介意せざるにはあらずや、豈慨嘆に堪へざる也、殊に無學鈍識なる中山驗者の言を聞け、祈禱御本尊行者擁護の鬼形鬼子母大善神と僭稱して些の憚る所なし、祈禱本尊とは何ぞ、本尊に祈禱と不祈禱の別あるか抑も誰に學びしぞ、愚昧なるかな、不都合なるかな、鬼子母神、鬼子母神堂中央首題の光明照被の以外に於て、奈何様の威力を有せるぞ、畢竟十界圓具の本尊たらずして祈禱の對象たるものありとせば、それは邪思惟也。吁、夫れ斯

ことになさげなき宗門の有様にはあらずや。

人或は吾人の言を難する者あり曰はん、高祖聖人御自身に於て別勸請を爲し給ひし事實あれば、我等宗徒之に習ふも何の不可あらんと、是れ一往當然の理論なり。然れども是れ深く祖意を解せざるの言と云ふ可し。何となれば高祖が別勸請と爲し給ひしは、之れ實に一時的方便手段たるに過ぎず、高祖は決して御自身當身の大事と仰せられし一期の大主義大主張と抵觸するが如きことをば爲し給ふ人にをばさぬことを信すれば也。殊に教機時國の次第を按ずるに、時に或は方便假設の應用的行爲のなかりしにあらずと雖、畢竟或機縁の爲に特殊に設け給ひしことのみ。即ち特別の場合に假用せられしものにして、宗徒一般が摸倣すべきものにはあらざる也、若し高祖又は先師が實際上眞精神より別勸請を爲し給ひたりとするも、今の時、風俗習慣制度文物、時代の思想の大に高祖及び先師の當時に異なるものあり。殊に形而上の學理論究大にその面目を新たにし、哲學宗教の研鑽漸く世人の欣仰するの現下に於て、非文明的非合理千萬なる雜多異様なる別勸請の本尊を設げんこと、既に甚だ不可也。況や高祖は宗教の五綱を教ふる給へるに於てをや、依然の舊形式を

墨守せんこと更に大に不可なり。殊に况やしかく重ずるに足らざるの舊形式に於てをや。更に高祖の之を一般に行はしめ給ひしや否やすら判明せざるの怪しき形式をや、吾人之と聖柱剝舟せざるべからざる所以を知らざる也。猶ほ剝實に意地云く穿鑿すれば、今の別勸請を爲す者と、今の別勸請の客体に歸依萬仰せる僧侶の腹藏を剖き來れば、實に忌むべき卑陋なる、私慾、我慾、貪慾、暴慾、迷慾、妄信、甚しきは動物的衝動の肉体的慾望等の爲にせられざるもの、今の大多數を占むるに於てをや。されば迷惑なるは諸天諸神にして、まことに瀆神辱佛の責罰を重大なるを思はずんばあらず。

由來吾人は信仰界に變化發達すべき方面と、否らざる萬古不易の方面とを具ふることを信ず。換言すれば、信仰に變る側と變らざる側とあり、乍併する變化發達すべきは部分的枝末なり、反之、萬古不動の大信仰に至ては、統卒的根本要素也。故に今の信仰心即ち内容に於て二面あると共に、外的形式即ち宗教狀態に於ても同様にて二門を有せるものなり。又根本的信仰に至ては恒に容態共に永久不變なるものなり、例せば釋尊が四苦の悲惨に遭遇し給ひし時の宗教的心意の狀態と、

大本尊の外、又一の別に神佛諸天を勸請すべからずと換言せば、別勸請は實際理論の兩方面より全廢すべし猶附け加ふれば、吾人が別勸請を廢止すべく唱道する所以は、宗義の紊亂を匡正し、宗門の腐敗を廓清せんが爲の故也。

前記に喩せざるが如く、別勸請の痛弊を以て宗門の實際に考察せば、今の腐敗墮落萎靡沈滞の最大原因を爲せるものは、實に御利益主義の別勸請に在るなり。否、綜合、宗門腐敗の直接原因たらんとするも、之れ實に立宗の大本に乖戾せる非道理の没行爲なり。更に之を社會問題、道徳問題等の方面より觀察せば、實に最も注意すべき惡風儀態現象にして、深重至大の罪惡を包容せる伏魔殿たることは、少くも實際白狀以外の事實たるなり。

吾人は最後に揚言すらく、若し別勸請の神佛なくんば一宗の成存すること能はざりとせば（今は宗門財源として）、吾人は喜んで其滅亡を社會國家の爲に希ふもの也。否、本化真面目發揚の爲に切望する所也。何爲ぞ意氣地なくも迷信妄行の愚夫愚婦を誑惑して、欺取の瞞着手段を以て法燈を挑くることを敢てする者ならんや。

菩提樹下に大覺證果し給ひし時の心狀とは、必や變化發達を來せしを想見し得べく。笈を負ふて大慈に登りし智誦法師、法華三昧より安詳として起て南三七七の敬啟を端倪し給ひし天台大師とは、豊州人ならざるも同一信仰なりと云ふを得んや。清澄山頭の閑寂業に夙く各宗の狀態を一瞥して、群盲摸象と嘲けりし蓮長房、四塵紛然、梵歌聲裡に堂々大主張を唱道し給ひし高祖聖人の前身なりき、而して信仰も亦僅かに双葉旂檀が漏す敬香のうれの如かりき。之れ今の所謂宗教的意識の變的把持の狀態にあらざるや。然れども、溢る、一視同仁的の大慈悲心に至ては、各々の一生を通貫し加之、佛陀、大師、高祖、毫も變異する所あらざりし也。之れ實に所謂不變の方面の根本信仰なり。されば外的不變の一例を挙げんが、宗教の三秘は不變の教條にして、宗教五綱は之れ變的應用の部門なり。されば前者は吾人法華行者の根本的信仰の形式を示したるものにして、後者は吾人が時處法機の場合に應變すべき形式を教ふる給ひしものなりと信す。

而して今爰に別勸請を論するに當り、この信仰の二方面より討究して、今の結果、現時我國の情勢に鑒み、吾人は大膽にも斯く論断せんと欲す、即ち統一的十界

此稿、宗友會の研究課題「別勸請の可否」に就て、聊か小見を開陳せしもののみ、堂々たる大議論に至つては別に其人あり、所懐固より之を以て盡すものにあらざれども、大体に於て言ひ表はせりと信す。

江湖の先進幸に教ゆる所あれ、

蓬萊の梅も香く匂ひな 願

新消息

宗婚式舉行

年甫早々芽出度筆路を辿ることの嬉しさよ、事は舊曆十八日に擧げられたる本宗教式に據れる結婚の典禮にて、新夫は東京日本橋區新右工門町にて有名なる大律師安田松慶氏の男岡苗安太郎君、(二十四才)新婦は下谷區御徒士町永比某の息女與志子(十七才)とて、兩者何れも教育あり品位ある人柄にて、新夫は在來の本宗信徒、新婦は元淨土宗の人にて近頃田邊善知師の講下にて新信仰の淑女なり、さて式の大導師は田邊僧都、媒酌人は醫士中村顯氏、式部係は杉野伊兵衛氏にて、左圖の如く列席の上

新婦

新婦ノ両親

同親戚

文字

導師

媒酌人

式部係

新夫

新夫ノ両親

同親戚

(一)着坐、(二)受持口唱(自誓持戒)、(三)諸尊勸請(導師獨稱)、(四)言上(導師獨稱)、(五)修法(唱題百遍)、(六)教訓(導師)、(七)祝盃、(八)受持口唱(自誓持戒)、(九)結了退場の順序にて最も厳肅なる舉典なりし由、就中「教訓」は導師が佛祖に代て、夫婦和合の要は三大秘法の信仰を基礎とし、忠孝倫理を全ふるにある旨を、厳肅に且つ懇切に諭示したるもの「祝盃」は總て導師より授けしもの「言上」は導師より本尊へ新夫婦の祝典を言上したるもの、由、而して式は午後七時に始まり同八時三十分結了、纏て別席に酒食の饗應あり、始終辟蕪の勞を執りしは杉野氏なりとぞ、何しろ芽出度祝典にこそ、吾曹は望む新夫婦一身同躰自今倍々信仰を愛固にして、宗法の爲め國家の爲め盡碎奮闘、迺れ明治の四條金吾たれ、至祝し至囑、嘆、

會と開かれしに、會するもの無慮數十員、何れも皆勇み立ちて新年早々統一事業の爲め、大法鼓突貫進撃の計畫成立せしとぞ、因みに該教區布教員の内能仁諤明師は千葉監獄教誨師に轉勤し、土屋日比野の兩師は舊鹽管長祝下より、學級一階宛昇進の榮を得られたりとぞ(祝丘小僧報)

●懸賞論文の募集 前項四教區布教員日比野觀義師は土屋能仁兩師の補助の下に、別記廣告欄に廣告せる通り觀心本尊抄の論文を募集せらる、由、斯は本尊問題の勃興せる今日好個の計畫にて、殊に顯本法華宗以外日宗各教團の現状を救ふべく本尊正義の顯揚問題、吾曹は其事業の首尾よく成功して、聖門統一の援軍たらん事を希ふもの、諸らくば有志の諸君廣告を熟覽して其募りに應せられんことを、

●同盟雜誌社 第六回會合用たり 本化宗友會第四回會合は本月三日鎌倉師子王文庫に於て開かれ、會する同人十有二名、宗友會の問題は「別稱論の可否」にて合評のみにて其舉りを告げ討論は再び來月十一日池上にて催す筈、其詳細は來月の團報に一東報道せん ●常樂院日經上人傳記 野日義禪師の熱心取調に従事されし常樂院日經上人傳記は、齋藤本山信徒總代姫路

●宗旨式の元且 宗旨式で元且を迎へたのは當年が手始めである、予が率ゆる信徒は萬事に先たつて予の自坊に集り、能所一齊御本尊に法味を供へ、元且の祝詞を述べ、予より御講始を行ひ祝盃を酌み、一ヶ年間に互る弘法策を協定して心地よく別れた、且つ信徒相互の禮禮を廢し煩得虚禮の弊を改めた、夫から今一つ ●組寺の年賀 も改良した、本年よりは禮禮を廢し、一ヶ處に會して祝詞を述べ、教家の社會に對する事業を協定して、先づ婦人會を組織した、而して婦人會の仕事として貧民學校を設立する事になつた、詳細は何れ追て報告するであらう、已上二件が本年の元且を迎へた規模である、(しづか)

かんばしや妙の御法を唱へつ、
善祝ふ庭の梅か香(しづか)

●四教區布教通信 豫て昨年八月より設立せられたる四教區に於ける宗義研究會は、布教員諸師の熱心と各住職の同情と、兩々相俟つて益々好成绩を奏せし事なるが、舊臘の如きは朔風肌を衝く寒天にも屈せず、日比野土屋の兩布教員が草靴掛けの區内視察に、如何なる情夫も厭起せでやは、それかあらぬか本年に入りて月の七日に、關本法寺に於て新年宴會を兼ね布教打合

三宅六藏氏其印刷費を喜給して、一部の冊子として出版せられ編者にも其一本を惠贈せられしか、菊版四號活字四十頁餘の美麗なる一冊子にして、師は普く之を同好の人士に施本せらる、心組のよし、郵券貳錢投せらるれば直ちに分與の榮を得ん、 ●聖祖門下大懇親會 本年は開宗紀元六百五十年に相當するを以て開宗當日をとし一大紀念大會を催さん爲り其準備として一大懇親會を開く事に決し本月十日日本橋區小傳馬町祖師堂に其發起人會を催し各教團の志士十余名出席し左の主意書及要項數條を決議せりと云ふ

●聖祖門下大懇親會のしらせ 宗門開かれて今年六百五十年の春を迎へぬ大君が千代八千代を壽く新陽に妙法蓮華經の御法の聲の愈々高からんを想へば益々嬉しく樂しき歳ぞかし此芽出度春を下して 聖祖の弟子檀那有智無智を嫌はず貴賤上下を隔てず共に一堂にあつまりて胸襟をうちくつろげ相語り相親み相祝はんこと真にいみしく喜ばしくはをばさすや さればさきに來る二十八日を以て東京兩國井生村、に於て聖祖門下大懇親會を開き清淨にして高雅なる

慈向と親密にして温かなる會台を爲すことを期す爰て
來るべき四月二十八日の開宗六百五十年に對する我等
聖祖の弟子檀那たる者の大覺悟を定めんとす 聖祖
の弟子檀那たる門下の僧俗諸君莫くは我等の微意を諒
し奮て來會あらんことを望む

開宗紀元六百五十年 一月十五日
明治三十五年壬寅

- 伊東專三 今成乾隨 今村隨順
- 飯田完融 井村尚也 井口善叔
- 井上仙吉 花房日秀 飛田圓智
- 小笠原日敏 鷲塚清次郎 加藤文華祖
- 發) 風間潤靜 刈米是寛 神田眞道
- 柿沼勝存 春日養元 田中義海
- 常興諦道 中川觀秀 黒澤日明
- 起 山川智應 山田日然 山田一英
- 山根顯道 松井義光 小島傳次郎
- 江上勝義 近江正瑞 秋山文朗
- (人) 齊藤宗民 里見圓海 佐野文高
- 宮川泰詮 宮田泰岳 柴田日珠
- 柴田顯秀 本橋義全 關田養叔
- 鈴木暉學 (いろは順)

(五)茶菓辨當配布

(六)隨意演説及談話

(七)萬歳三唱

尙六百五十年紀念大會方案は發起人に於て各教團高德
の意見を叩き之に依りて原案を起原し懇親大會に提出
し協定を成る者なりと云ふ

●國友如淡氏の永眠

總本山妙滿寺信徒惣代姫路國友如淡居士(本多團長の
妹婿)の如何に熱烈至誠宗法の爲めに盡砕せられしか
は、世既に定評あり今更喋々を要せざる事なるが、氏
は昨年六月大に期する所ありて臺灣に渡り、雲林地方
に商業を營まれしに、不幸瘴癘の侵す所となり療養其
効を奏せず、十二月十一日四十四才を一期として溘焉
無垢なる外護の大檀越を失ふ、吾曹悼惜の至情涙滴點
々殆んを硯に對ふに堪へず、爰してや遺骨を擁して八
重の沙路を涙と共に白鷺城下に歸りませし未亡八重野
子の心情如何に……、さて葬儀は本月十一日
本多僧正の大導師にて慶蓮山妙立寺に執行せられ、本
山よりは管長代理として野口本山部長の臨席あり、大

- 一 會日及場所 一月二十八日 午後一時 向爾國井
生村樓
- 一 會費 金五拾錢
- 一 入會の手續 事務所若くは申込所に氏名を告げ會費
を納め入場券を受取るべし
- 一 事務所 日本橋區小傳馬町祖師堂
- 一 申込所 芝區金杉圓珠寺 麻布區霞町鬼子母神室
赤坂區一ツ木圓通寺 牛込區神樂坂善國寺
市ヶ谷富久町修行寺 小石川區白山前町大乘寺
本郷區田町興善寺 下谷三輪町正運寺
谷中日暮里本行寺 淺草區南松山町本立寺
淺草區山谷正法寺 本所區太平町千榮院
深川區靈岸町圓隆院 千住町中組九四井上仙吉
其南品川 統一 團 池上根方 日宗新報社
鎌倉要山師子王文庫
- 一 申込期限 一月二十五日を締切とす但し事情により
期限後と雖或員數を限り入會を諾す
- 一 開會の順序 (一)開會の辭 發起人總代
(二)祝辭 會員 總代
(三)演説 來賓 總代
(四)開宗六百五十年紀念大會方案協定

阪より清瀬貞雄僧都、明石より石渡日毅師、岡山より
能仁事一師、津山より山名木信師等僧員二十名餘の列
席あり、姫路、岡山、津山、志方、大阪、神戸、京都
等の各地統一團員、第十師團の軍人軍屬、各地信徒等
或は團體を代表して或は個人として、無慮一千名弱の
會葬者に、山の内外人を以て充填せられたる由、隨て
吊詞吊電等積て山の如かりし、さて又式は正午自宅法
要、午後一時半着寺、直ちに一同撮影、其より法要款
徳章(清瀬師)管長の吊詞、野口部長代讀)板垣大僧
正の吊文(野老乾爲師代讀)小川日豊師の吊歌(石渡
日毅師代讀)姫路青年會代表三宅六藏氏の吊文等、非
常の長時間を要したる由、今其重なる吊詞數章を摘
載して、居士盛徳の一端を表章せん。

明治三十四年十二月十一日日本宗總本山信徒總代の
姫路なる國友如淡氏の身まかりけるをさへて

かねてより常なきものとしりつゝ、も
きのふけふうとれもひきや若

現し身は霜どきぬても法のため

法のためつくせし君がいさをしは

わしの高嶺に見うなはずらん
御佛も君のいさをそめてつゝや

わしのみ山にさうひゆくらん
さはりなく運のうてなにのほりつゝ

驚のたかねの月やめつらん

總本山妙満寺信徒總代國友如談居士の身まかり給ふをさゝ御靈前にたむけんとして

杉野伊兵衛

雲山へささかけされし國の友

みのりの庭に會ふうたてき

正法の行者如談君の佗界に移れるを聞て

日 照

ゆく君はたゝしき法のひかりもて

三つの寶の都にうゐる

●吊國友君之靈

不肖友直謹テ友人國友如談君の靈前に告ぐ友直の君と相識るや茲に年あり而して君は突如志を台灣に立て明治三十四年六月を以て將に渡台せんとし予も亦職を台灣に轉ずるの命を受くるに會し爰に行を同ふせんとを約し行李匆匆夫人同伴陸に汽車の黒煙を捲き海に狂瀾怒濤を蹴りて以て本島の南端に安着せ

して曰く嗚呼本島にも如此ものあるかと此一語一聲は儻かに君が腦裡に達せしなるべく予をして思はず快哉を連呼するに至らしめたりき

溪流漸やく涸れて縈回水淺く奇石怪巖其間に磅礫たり秋高く馬肥へ天朗かに氣澄める我雲林橋畔の風光闊然として幽廓然として曠此時に當り君偶々瘡痍の侵す所となり終霧鬪々雷に扁鵲の妙術を待つものゝ如かりし而して予か親友前田雄成君亦君と親交あり兩個の情誼は恰も膠漆の如く鐵石の如し日々予等と相携へ醫を迎へて常に病床に臨む徳望ある夫人晝夜傍に侍し保養看護殆んど到らざるなく四隣遠近皆其徳に感せざるはなし君にして此夫人あり嗚呼宜なる哉

然り而して君の病勢益々威を恣にし術成病院長守備隊軍醫斗六病院長等の諸氏屢々會診百方手を盡すと雖ども陰霾なる一天の黒雲は翳々凝て彌々冥く四隣寂として天地に聲なく泣焉四十有四を以て眠るが如く不歸の客とはなれり嗚呼悲哉予は憂愁腹々胸に滿ち憂鬱心を鎖し泣涕喉を塞ぎ復言ふ所を知らず此無限哀情の情は懷裏に往來し見るもの傷心の種ならざるはなく聞くもの斷傷の媒ならざるはなし嗚呼人生

しは正に同月二十六日なりしなり而して相携へて居を雲林に卜するや朝夕來往毎に胸襟を開て以て肝膽相照し談笑娛樂或は本嶋陰雲の慘情たるを語り或は鉄壁の菜花に戯むるゝを弄し時に或は君の平素熱心なる顯本法華の綱要を聞く等其談話日として精神上に涉らざるなく夜として道理を説かざるはなかりき予會て知る君の温乎たる其容は恰も東風の暖きを送るが如く寛厚なる其量は春風の胎蕩に浴するが如し温顔能く人に接し敦厚能く人を待ち來る者は拒まず去る者は追はず其徳望遠近に洽ねかりしは君が性の温厚にして至誠天を動かし丹心日を貫き信義を是れ重んずるに依らずんばあらざるなり夫れ義は千斤の鼎よりも重く信は金石よりも堅しと宜なる哉君の人に交るや常に權門に阿らず時勢に媚びず然も却て眞の遜讓なりしは予をして轉た古語の所謂君子の盛徳を想見せしむ而して予か部下たる風官岡部氏明治三十四年九月公務旅行中土匪の爲めに惨死を遂げ之が祭事を營さんとするに當り予は君に讀經を請ふ時に炎威燦々人に迫るにも拘らず快語以て之を終れり是則ち友誼の厚きに依るべしと雖も抑も亦君が平素佛法熱心なる證左となすに足るべし列席諸官耳語賞讃

は猶は朝露の如く固より是を知ると雖ども之を目にし之を耳にするもの難か悲惜哀嘆せざらん哉嗚呼悲哉茲に薄奠を供へ謹て祭る向くは享けよ

明治三十五年一月初の二日

台灣陸軍給廠雲林出張所

陸軍歩兵中尉從七位勳五等平澤友直

●謹て亡父の靈に誓ふ

男文次郎

嗚呼悲哉吾今孤となりぬ涙下りて袖を沾し情逼りて胸破れんとす天地晦冥晝尙暗く悲雨愁々鬼神哭す嗚呼悲哉

人生悲痛多し殊に死を最とす、就中父子の永訣に至りては千載の恨事其の悲み堪ふる所にあらざるなり文次郎今此悲痛に遭遇す死生命有り私する能はずとは云ふとも豈悲しからずや

古語に云ふ樹欲靜風不止子欲養父不在と文次郎父の鴻恩を受けて未だ其萬一を報ひず然るに己に父は養を易へ給ふて其の恩を報するに道なし遺憾何ぞ之に過ぎん豈悲しからずや

然れども退て考ふるに徒に悲むは丈夫のことにあらず又宗教によりて安立せるものことにあらず思ふに父在すも其の滿腔の志願は一に護法護國に存する

なるべしされば今後父恩に報ずる道唯此父の志願を繼ぎ法と爾との爲に献身盡碎以て妙法を四海に廣布し國家を富岳の安きに置くに於けるのみ又次郎不肖此志願を遂ぐるに道なし恰も千斤の重荷を擔ふて泰山に上り一葉の輕舟に指して大海を渡るか如し細心翼々踏霜載星以て勉勵すとも尙其及ばざるを憂ふ但幸にこの千載一遇の代に際會す願くは學成り世に立つの日至らば誓て父が志願を繼紹し以て父恩の高くに報せん

南無本門常住の三寶諸尊護法列位の諸天善神來臨影齋の道場に於て譯て本質院正今日勇居士に誓ふ

●國友如後君を祭る文

維時明治三十五年一月十一日台灣陸軍監督部員陸軍軍吏正七位勳六等前田雄成謹みて菲奠を供へ以て國友如後君の靈を祭る君越洛人士として用ゐられ會て姫路英業會幹事に推選せらるる其他市の爲に盡す少ならずと聞く又豫て台灣に商業を試みんとするの念慮深く客歲六月奮然姫路を去り夫人重野子と同行台灣雲林に來りしは正に是れ同月廿八日とす雄成會て姫路に在留中友人中村君より屢々君の爲人を聞き心切かに敬慕したりと然るに今や君は雲林に來り雄

尋常凡夫の得て爲す所にあらず是れ即ち妙法の功德にあらずんば曷ぞ能く斯の如きを得んや真に我等をして無限の感動を起さしめたりき君は須臾にして安穩眠るか如く逝けり嗚呼哀哉是れ實に明治三十四年十二月十一日午後六時廿分なりき
嗚呼良友をして永く泉下に歸せしむ天に呼べども答へず地に叫べども出でず嗚呼哀哉嗚呼然として涙下る將に腸斷ち難強けんとす嗚呼天君に假すに壽を以てせば素志必ず成功すへし然るに中途にして逝く何う天の無情なるや實に君の死は獨り姫路市の爲めに痛むのみならず我か守備隊の爲めに惜まざるを得ず然りと雖ども君の令徳美名は昭乎として永く存し觀々たる増位の山嶺洋々たる市川の流水と共に竭さず又淑徳ある夫人は君の遺業を繼ぎ永く君が冥福を祈る君亦遺憾なかるへし雄成聊か文を作りて以て其の靈を招く向くは瞭然として影向せよ

顯本法尊宗總本山信徒總代村上貞藏恭く國友如後君の靈に告ぐる所あらんとす君は能く本宗の宗意を領し深く宗意の安心を極め正義の發揚と宗家の興立とを期し已に貢獻する所の功績歴然たり君は我總本山

成偶然君に見ゆるの幸を得歎喜曷も勝ん君天資温良にして篤實夙とに佛學を修む上に對して阿ねらず下に對して酷ならず上下共に君の性行に感せざるはなし雄成一たひ君に見へしより愈々敬慕指く能はず朝に内外の時事を語り夕に佛敎の講説を聞き日として面接せざるはなし其親厚兄弟も暫ならず日月の永き眞に一日の如し痛まし哉君同歲十一月二日の犯す所となり辱に就く夫人重野子友人平澤君及雄成等に謀り先づ小林軍醫に受診す軍醫熱心晝夜往診是れ努め良劑貴藥を投じたるも病性頑慢容易に奏効を見ず其の月の中旬雲林衛戍病院長千野醫正に受診し最後に斗六地方病院長西君を聘す爾來三君向は協議を凝らし百方手を盡されしと雖ども遂に其効驗なく君日を送りて身衰弱に赴く而も其精神は益々正確傍人に説くに佛敎のことを以てし又其臨終の稍々前に方りてや列坐の人々に對し夫人重野子をして悲しく永訣の辭を傳へしめ且つ自ら佛書を繕きて之を夫人に示す夫人從容承けて以て衆に示す一坐肅然として感涙に咽々蓋し聞く其の要領は臨終に際し妻たるもの悲哀すべきものにあらずとの佛祖の教を覺らしめんが爲めなりと嗚呼死に臨み君の從容たる行爲は到底

の信徒總代としても亦其盡せる所紛からず故に斯道に志あるものは其情たると俗たるとを問はず均しく敬慕せざるはなし蓋し君が理想したる前途の企畫君が遺留したる護法の施設は尙は遠大なるものありて存せしは貞藏等の親しく知る所貞藏等復君と相携へて今後益々事に此に當らんと欲し實に君の力を藉らざるを得ざるもの二三にして止まらず然るに君は遠大の志望を包みて卒然長逝す嗚呼真に哀むべく又惜むべきの至りなり貞藏等君の懷きたる護法の經營に關しては誓て其實行を期し其實現に努め以て立正安國の大義に向つて幾段の進歩發軔を見ずんば止まざるべし君請ふ安せよ謹んで告ぐ

●南無妙法蓮華經

●吊 頌 辭

虔んで茲に本門壽量の大本尊に向ひ哀感誠證を請ひ奉る 仰願くは大本尊來臨影響をましまして照覽を垂れ玉へ情々以るに本門三秘の風は飄々として塵垢の軒を拂ひ信念受持の神洞を爽快にす顯本實在の月は皎々として群類の卷を照らし度生利物の白毫裡に活動す偉哉壽量顯本の大利妙益得て測るべからず竊に以るに無始本有の眞諦三千常住の妙境を達觀せる大

覺世尊を以てすら猶は假に無常涅槃の雲に隠れ雙林一片の煙となり玉ふにあらずや彼の春去りて夏來り秋冬回りて春還た復る彼の蒼なるもの何ものぞや是則宇宙可知界に於ける生住異滅の現象に外ならずや茲を以て天地逆旅の間に存するもの貴賤老若其の品位の如何を論せず皆悉く是圈内を逸するを得ざる也茲に故國友如淡君は資性濃厚忠直事を爲す真直に業を遂ぐる剛敢に百事苟くもせず其本宗を信するに至れるや常に身口意三業に經て愈其信行を篤くす就中正義の師を外護し正義を貫透せしか如き最も顯著にして世の風に其偉勳を認むる所なり回顧せば廿九年本宗が彼の統一の大義を天下に唱道するに當り氏は卒先して之に參畫し播磨統一團なるものを妙立寺野老師及三宅純一君等と共に組織し以て大に斯法の爲めに鞠躬力行せる等其功績甚多し加旂卅二年總本山の信徒總代に推薦せらるゝや村上貞藏君及久城茂太郎君等と共に今日に至るまで能く總本の利害を稽考し能く其藩塲と爲りて信徒外護の標準を示す等其功績擧て數ふべからず嗚呼惜哉昨年十二月十一日をして享年四十四歳台灣の客土にして病に罹り溘焉として逝きぬ矣嗚呼悲夫雖然氏の信念や能く首察に丁ら

安心や能く決定せり氏に於ける所期の國土は明確に其實在を證せり焉んや悲悼すること要せんや氏よ寂光山頭月朗かなる處三五七九の雲を拂ひ無垢林園華開ける邊事智慧の調ひに浴し諸天と與に天鼓を撃て衆と與に曼荼羅華を弄ひ以て娛樂快樂其欲する所のまゝ實に我此土安穩天人常充滿の句を出現し本佛釋尊柔懷慈悲の尊容に呎尺し奉ること蓋し遠きにあらざる也今や喪主篤く氏を葬り會葬者遠近より來れるもの甚た多し亦以て氏の徳あるを知るに足る茲に謹んで頌徳偈を呈す向くは鑿よ

頌 曰

千直千剛 清淨外護 難思境智
所得宛然 信因在現 極果示來
悠後靈山 齋樂諸天
明治三十五年一月十一日顯本法華宗傳道沙門
僧都 清 瀨 日 憲 敬白
尙は松尾忍水石渡日毅其他諸氏の吊文は次號に掲載せん

廣 告

●廿世紀紀念觀心本尊抄論文懸賞募集緒言

一陽來復廿世紀第二の新年を迎へたり蓋し年代若くは世紀の改まると同時に總ての社會に進歩改良の起りし現象は東西歴史の證明する處にして余輩は如斯現象を愛し且つ作らんとする徒なり余輩は如斯信念と思惟を以て本世紀の未だ若き新年に際して聊か宗教界に貢獻し以て幾分の進歩改良に勉めんと發願せり开は即ち聖祖日蓮が一期の魂魄を以て目せられたるもの即ち佛教の眞髓を發展せられたる觀心本尊抄の意義をして僧俗の分ちなく普く知得せしめ現今濁々乎として毒を流せる宗教的病源を一掃し世の所謂淫祠・競法・迷信・執妄等の如き其信徒と宗教其れ自身との區分なく根本的に陶汰して完全なる教徒を作り無敵なる活信仰を呼吸せしめ眞正なる宗教客體の實前に跪ぶかしめん事を示導せんとするものなり

蓋し本尊抄は聖祖一大事の法門にして佛祖の本懐を妙判せられたるもの即ち佛教統一の眞義なれば其意義甚だ至高なるを以て淺學薄識の徒一見再覽遂に其本意を獲得するもの抄し茲を以て余輩以爲く此種の人の爲め

に當抄の大意をして最も平易に最も明晰に而も文辭の如きは敢て擇はざるも本抄の眞意を傷はざる好譯述あらしめ凡庸卑俗を裨益する所大ならん是れ恰かも本抄に遭逢すると同一にして例せば鼓者の能く歩するが如き感あらん是れ發願の主眼にして又慈眼視衆生の一行たるを失はず余輩は現今日宗各教團の有志士に請ふて本抄の活論文を求め是を一束して以て各教團の博識高德に檢閲撰評の勞を煩はし而も其采當を得たるもの數十種を印刷に附し以て一大好導師となさんと欲す各教團の志士願くば余輩の發願を發せられ別冊規約に依り爲法爲宗健全なる活論文の送與あらんことを蓋し是れ佛教統一の一助たらんか敢て願望の至りに堪へず和南

本尊抄懸賞論文募集規約

一本論文ハ宗祖著觀心本尊抄ノ大意ヲシテ普ク通俗ニ識得セシムルヲ以テ主眼トスルガ故ニ文辭ヲハ撰バズ可成的平易明瞭ニシテ祖意ヲ傷ハザルヲ以テ本領トス

但シ論文ハ一行二十字詰ニシテ十行ヲ一頁トシ三頁以上四頁以内トス

二論文募集期ハ一月二十日ヨリ二月廿五日迄トス

但シ期日後ハ受ケズ
 三應募論文ハ廿八日ヲ以テ一束シ日宗各教團ノ高僧知
 識ニ轉次檢閱取ヲ乞フモノトス
 但シ各高僧ヘハ交涉中ナルモ左記ノ諸師ヨリハ既
 ニ贊成承認ヲ得タリ
 田中智學居士 本多日生師 田邊善知師
 小林日蓮師 坂本日桓師 小林日守師
 山崎日暉師
 四應募論文檢閱評議ノ上ハ當撰者ニハ左ノ割合ニ依
 リ賞品ヲ送呈ス
 特別一等 圖書(大判録内全部)開結附法華經一部
 二等 遺書全部 法華新註全部
 三等 遺文録全部 安國論新註
 四等 圖書五大部
 五等 圖書五大部
 普通當撰者ヲ二十名トシ各々賞品トシテ觀心本尊抄
 及安國論一部宛テ呈ス
 當撰ニ洩レタルモ比較上良好ノ分五名ヲ撰ビ本尊抄
 一部ヲ與フ
 但シ各當撰者ヘハ三月廿日後ヲ以テ其旨ヲ通牒シ
 四月八日ヲ以テ小包ニテ送呈スベシ
 五當撰者廿五名及比較的良好ノ分五名ヲ撰ビ三十名ノ
 論文ハ四月八日迄ニ美觀ナル印刷ニ附シ「廿世紀紀
 念觀心本尊抄活論文」ト題シテ天下公衆ニ領テ永ク
 紀念トス
 但シ論文提出者ニハ當撰ト否ニ抱ハラズ無料送呈
 六紀念印刷物ニハ各教團ノ諸大徳ニ乞ヒ序文數十葉ヲ
 附シ末尾ニ論文呈出者一同ノ芳名ヲ掲載シ永ク紀念
 ニ存ス
 但シ印刷書ハ大約百頁ノ見積リナリ
 七本募集ハ神聖ヲ保チ兒戲ヲ避ンガ爲論文提出者ハ送

附ノ際必ず郵券十五錢ヲ封入セラレ、事
 八本募集ニ就テハ發願者ノ素意ヲ贊シテ檀信徒ヨリ若
 干ノ事業費ヲ喜捨セラレタルモ懸賞品ノ買入印刷費
 送附料等多額ノ費目ヲ要スルヲ以テ各教團ノ僧俗諸
 士ニシテ贊成ノ仁人ハ(郵券ニテモ無差闕)八錢以上
 八十錢迄ノ淨財喜捨ヲ乞フモトス
 但シ廿五錢以上ヲ特別贊成者トシ無料ニテ印刷物
 ヲ送呈シ普通ハ印刷費費申受候事
 九義捐御賛成ノ仁人ハ一月二十日ヨリ三月二十日迄多
 少ヲ論セズ御喜捨アラシク切望ス
 十紀念印刷ノ卷末ニ論文呈出者ト同シク義捐金及喜捨
 芳名ヲ記載シ永ク紀念トス
 十一論文及喜捨金ハ千葉縣長生郡白濁村安住寺内懸賞
 部宛送附ヲ乞フ
 但シ各到着ノ際ハ必ず受領證ヲ交附スベシ
 以上
 明治三十五年一月元日
 顯本法華宗第四教區常置布教員
 古所安住等任職
 發願者 日比野觀義
 全管場本大寺住職 土屋 眞 容
 補助者 能 仁 諦 明
 全 七渡鑑龍寺住職 能 仁 諦 明

謹賀新年

明治三十五年一月元日

東京淺草區新福井町 統一團本部

謹賀新禧

明治三十五年元旦

東京府荏原郡品川町南品川 統一團團報部

恭賀新正

大阪、京都、堺、千葉、津山、岡山、廣嶋、姫路其他各地

統一團支部

喪中に付年始欠禮仕候

明治三十五年一月

本多日生

謹賀新正

長谷川日濟 村上宏玄

恭賀新正

品川正法護持會

恭賀新禧

田邊善知

恭賀新正

井口善叔 關田養叔

恭賀新年

井村恂也

恭賀新正

今成乾隨

恭賀新年

窪田純榮

恭賀新年

清瀨貞雄

恭賀新年

秋葉顯正

恭賀新年

上田賢正

恭賀新年

松尾英四郎

恭賀新年

村上貞藏

謹賀新年

飛田圓哲

恭祝新年

鈴木暉學

謹賀新年

能仁事一

明治三十五年一月元旦

山名木信

岡山上之町

謹賀新禧

久城茂太郎

岡山上之町

恭賀新年

宇垣字三郎

岡山勝屋町

恭賀新年

内藤武八

恭賀新年

河野日台

恭賀新年

大熊虎太郎
松尾英四郎

謹賀新年

新正法興隆邪法廢滅

備前和氣本成寺信徒

吉岡熊太郎

雜可谷本染去住職

謹賀新年

田久保日城

恭賀新年

山根顯道

恭祝賀開宗六百五十回
之新春

東京谷中日暮里
本行寺内 橘香會

謹賀新年

野口義禪

恭賀新年

石渡日毅

恭賀新年

内藤智厚

謹賀新禧

久我默宗

謹賀新年

能仁諦明
日比野觀義
土屋眞容

明治三十五年
一月元旦

賀正

中村乾信

恭賀新年

野老乾爲

恭賀新年

里見圓海

日宗專門夏期講習會の講義録に就て予は大に不満を懐くが故、予の講義は掲載せぬことに橘香會へ申込んだ、其要旨は各講師の講義が總ての點に不平均であつて其が爲め夏期の講義が冬期に成ても出版されないからである 若もうのまゝ出版すれば宗教家の公義を無視したるもの、予は更に其非を鳴すに躊躇せず責任を帯びて一言購讀者に告ぐ

講師 田邊善知

有所感自今禁酒

明治三十五年一月元旦

飛田圓哲

廣告

主筆 田中智學居士

妙宗

每月一回(六日) 每號大附録附發行
所相模鎌倉要山師
子王文庫
定價一部金十錢
(附録共)郵税金一
錢壹ヶ年前金壹圓
貳拾錢(不要郵税)
送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事
一月六日「第五編」第一號「既刊

主筆 加藤文雅

日宗新報

毎月三回(八日) 發行、發行所武藏
池上日宗新報社
定價一部金五錢
八十五錢(半年分)
八十五錢(半年分)
壹圓六十
(壹年分)壹圓六十
五錢、一切前金の事 送金は池上郵便受取所
へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」に御指定の
事、一月八日「創立第八百輯」革新第二百廿四
輯「既刊

明治三十年二月十四日(十五日)發行
(便物認可毎月一回(十五日)發行)

稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前
金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限
一講讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要す
る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節
拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年一月十五日印刷發行

發行所 東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地
編輯人 本多日生
印刷人 藤崎通明
鈴木障學

發行所 統一團團報部

●主義

一日蓮上人の感誦……………聖應院稿

●旃檀林

一顯本の命……………法如來

●至梵天

一靈海の法話……………信唱院

一調津波害民を救へ……………今成乾園

●別乾坤

一本門の本尊……………本成院

一春何處集……………詩佛會

一和歌數首……………和歌會

一漢詩一律……………稱業正唱

●衆妙門

一常樂院日經上人(樓)……………野口義壽

一星光錄……………松尾忍水

●増上縁

一正宗の編纂に謀る……………石渡日毅

●新消息

◎五國布教の記◎古備通信◎千葉陸免因保護事業◎開
宗六百五十年紀念事業◎同盤雜誌社及宗文會の會合◎
佛記符大説◎本尊抄論文藝叢集に就て◎道場復興
◎夏期講義録出版セリ◎別格本山妙立寺方丈の再建;
廣告數件

行發日五十月二年五十三治明

第八十二號

統一團報